わが骨を埋むる土地を年老いて定めむとせし心たがひぬ

先立てる子らの愛しさ時折は花も供へむ香も焚かばや

亡き子らを葬る墓所のからうとにうつしみわれの入りて見むとす

われもまた入らむ所と身をかゞめコンクリートの室見廻はしぬ

落ちつく先はコンクリートのこの室か寂しけれども心安けし

生も死も紙の一重の隔りも無からむものか墓に入りつゝ

からうとに一度入りて出で來つる身は生きながら死せるに似たり

わが骨を埋むる墓をつくりたり見度くし思ふわが葬式を

うつし世をうるさしとわが思ふとき墓の中にてしづまらばよけむ

初夏の空清々し生も死も忘れて仰ぐみどりの光

新體制

勢は潮のごとし富める者も貧しき者も諾はむとす

新體制如何になりゆく產無くて働く民を安堵せしめよ

働きても食はれぬ民のある世をば過ぎし昔の語り草とせよ

財閥のなかに働けば新體制に不安を感ずと同僚の言ひ居り

新體制の後を思へばいささかは吾等に及ぶこともあるならむ

私事（わたくしごと）すべて思はず新しき世に處せむとすみ民
吾等は

禪寺に共にありし日思ほへば君やまことに大
器なりけむ（後藤隆之助氏）

若きより容貌魁偉世の常の人と異りき後藤隆
之助

當時修行中の吾等が最も畏敬せる先輩は故志賀直方氏なりき近衞公背後の第一人者なりしといふ

後學のわれら畏敬してやまざりし君の志今か
徹（とほ）らむ

偶感

理想持ち世に生くるとき何人か足らふ心の遂
にあらざらむ

惡戰苦鬪滿身創痍のわが身とも時折思ふかへ
りみすれば

かみそりの如き鋭き人に伍し魯鈍のわれや誠
つくさむ

世の中にわれの不滿のいくばくか新體制後改
められむ

未曾有の時局思へば一身の安きを願ふときな
らざらむ

紀元二千六百年奉祝日

紀元二千六百年を祝ふ日の空の眞晴れや思ひ
悠けし

靜かなる山手の街に鼕々と太鼓ひゞけり隣組
祝賀式

奉祝のちまたゆきつゝ百年の後の日本を思へ
ば樂し

觀艦式

海を塞ぎ軍艦並べり遠くまで黒々と丘陵起き伏すごとし

日本海軍の精鋭こゝに集りて太平洋の波濤(なみ)を阻(はば)めり

秋の日のさやけきなかに天皇旗ひるがへしたり御召艦比叡

御召艦艦列を進み喇叭の響萬歳の聲艦毎に起る

房總の方より現はれ飛行機の大編隊は空を蔽へり

帝國海軍の威容を觀れば太平洋の波荒くとも恐れはあらじ

觀艦式終る卽ち艦列の各艦うごけり非常時いまは

伊勢神宮

勅使の宮あしたの宮路おごそかに進ませ給ふ大神の前

遠き代をさながらにして鎭まります宮居尊く身のひきしまる

尊しや畏しやたゞにおろがめるわがまなこより涙あふれ出づ

五十鈴川水底すみてゆく雲の影もあかるし神の代思ほゆ

橿原神宮

秋の日はさやけかりけり畝火山松の木群もつばらかに見え

新嘗祭のけふを詣づる人多し警防團員國防婦人會

紀元二千六百年を祝ぎて橿原の宮に額づくわれは

すめらみくにいよよ榮ゆる年にして宮居ととなふ畏きろかも

久米の子らこゝにかちどきあげにけむ今もみいくさの進むごとくに

橿原の遠つ御代よりうけ繼ぎて仇なす者は撃ちてしやまむ

折々の歌

伊勢詣りの旅より歸りナチス黨の經濟政策を讀みつぐわれは

フンク博士の理論もよしと思へども日本の爲めに取捨あやまるな

わが國の經濟政策悉くナチスに眞似て人疑はす

神國日本とわれは思へば政策にも獨自の立場うち建つるべし

十二月某日川崎海岸

沖合より實彈射撃の音聞ゆさし迫りたるけは
ひを感ず

義弟の子黎子死去

入學の日を樂しみて待ちし子の棺に入れたり
小學讀本

御手前はおとなも及ばず茶の道に賢しこかり
ける童なりしを

あるとき

武藏野のあら草なかに咲く花のかすかなれど
も匂ひ顯(た)つべし

巻末記

一

少年時代歌に趣味を持つてから今日迄折にふれ詠んだ歌を集めて「歌集三十年」と題した初期の學生時代のもの少數を除き、大部分は社會人として働く間に詠んだ歌である。凡そ文藝などとは緣の遠い繁忙な職業に從事しながら、永い間今日迄何うにか續いて來たのは主として花田比露思先生御指導御鞭撻の賜ものである。先生は歌道精進を以て人生の修行道であることを教へられ、又私のごとき實業界にある者も歌を詠むことを奬勵された。私は常に「怠けて居ては先生に相濟まぬ」と反省しつゝ今日に至つた。併し何分忙しい身體であ

るのと、菲才魯鈍の爲め、自分で滿足する樣な歌は詠み得ない。私の歌が未熟なのは私の未熟なためで、未だ人間として修錬途上にある私として致方ないことゝ諦めるよりほかない。然るに花田先生は私の歌を集めて上梓する樣熱心にすゝめられ、御自身出版の手配をして戴いた。更に將來に向つて發奮する樣との御鞭撻と思ひ感謝と決意とを新にする。出直して修行する心持から、禪語の「三十年」を以て歌集の名とした。

二

私の鄕里會津は武を以て聞えたが、文の方面も重ぜられ、明治戊辰の役の勇士で歌人も少なくない。その勇士の一人であつた星野楓國先生は永らく會津中學に國語漢文を教授せられ、又歌の指導もせられた。其の感化は相當多かつた樣である。會津中學に入學後私は武道と共

に文藝の方でも多くの先輩と親しくなつた。その一人に後年詩人外交官として有名になつた柳澤健氏がある。柳澤氏は私より二級上の先輩で當時盛んに詩や歌を作つて居られ私にも歌を勉强する樣すゝめられた。私は折々歌も作つたけれど其頃級友と「ホトトギス」を愛讀し俳句を主に作つてゐた。

明治四十年(十七歲)初夏修學旅行で南會津に行つた時、この歌集の卷頭の歌を詠み、我等を引率せられた國語漢文の教師山野上長治郞先生に賞められた。そんなことのあつた爲めか又柳澤氏の激勵もあつて爾後俳句は殆ど止め歌を作る樣になつた。當時は新詩社の全盛時代で、私共の歌も明星流であつた。

大正二三年から私は根岸派の歌を愛好する樣になつた。當時私は慶大在學中で禪の修行に傾倒し作歌は少なかつたが思想上にも作歌上にも變化があつた。以前の私の歌は空想的概念的なものが多かつたが、子規の寫生を重ずる現實的詠風は參禪をしてゐる私の心境に合

つた。私は萬葉集を讀み子規、左千夫、節等根岸派先輩の歌に親んだ。又當時發行せられた齋藤茂吉氏の「赤光」にも感銘を受けた。私は「アララギ」の愛讀者となり永い間其の歌風の變遷發展を見て來た。

慶大卒業後三井に入社した其頃會社關係の人達が歌誌を出した。私の歌が萬葉張りだといふので評判になつた。併し前歐洲大戰の爲め日一日と多忙になり中絶した。

大正十年の秋今井規淸君から花田比露思先生が歌誌「あけび」を創刊せらるゝから參加する樣勸誘を受けた。私は素人でほんの餘技として歌を詠むのだから、單に「あけび」の讀者になる積りで居た處今井君は花田先生の御宅に私を連れて行つてくれた。花田先生にお目にかゝり歌に就て色々承はつた。私は歌に對する先生の眞劍な態度に打たれ、歌も參禪同樣自分を向上せしむる修行道であると思ひ駑馬に鞭うつことを誓つた。これは私の兩親も大層喜んでくれた。

大正十三年花田先生は京都帝大學生監として赴任せらるゝことゝ

なり「あけび」は私共の手で發行することになつた。併し何分忙しい勤めを持つのと菲才無力な私は佐伯仁三郎君のごとき熱心有能な助力者があつたに拘はらず永續きせず、先生に御斷はりせねばならなかつた。これは花田先生首め「あけび」の方々に御迷惑をかけたことゝ自責の念を禁じ得なかつた。併し幸にも其後富坂賢太郎氏等が其の衝に當られ立派な功績を擧げらるゝに至つたのは深く感謝する所である。

昨年七月より「あけび」は友誌「武都紀」と合併し「八紘」と改題して新しき發展に向つた。「武都紀」は嘗つて「あけび」の幹部として後進を指導せられた依田秋圃、淺野梨鄕兩氏等の創められた歌誌で、私としては親しい方が多く其の合同は大變嬉しいことである。而して私の拙い歌集も「八紘文庫」として世に出ることになつたのは光榮と思ふ次第である。

三

この歌集は皇紀二千六百年を祝賀紀念するため出版する筈であつたが遲延した。當時私は竹馬の友柏木信一郎君の好意により私の初期の歌を集めた。現在その儘取る樣な歌は少いが自身には捨て難いものも多い。併し三十數年間の歌を一册の歌集にすることは困難であり、近作を多く收錄したいと思つたので大部分初期の歌を省いた。尙集中には省いてよい作も多いが、作者としては何らかの意味で殘したものも澤山ある。要之、三十餘年間の生活なり感激なりの赤裸々な斷片的集積である。これを纒めて見て往時を偲ぶよすがとなるが色々不滿も覺ゆるのである。併し過去の懺悔であり至らぬ自分の姿であつて見れば致方がない。

歌集出版遲延の間に世の中は急轉回した。支那事變は大東亞戰爭に發展し、皇軍は連戰連勝輝かしき戰果を擧げ、今や我國は歴史あつて以來の大飛躍をなしつゝある。私はその感激を折々歌に詠むのであるが、この集にはこれを收むるに至らなかつた。「み民われ生けるしるしあり」の感激に生き今は唯君國のため不惜身命の覺悟を以て職域奉公に邁進せんとするものである。

尙この歌集に挿入した南部恐山の繪は自分の舊作品であるがこれも紀念と思ひ採用した。

この歌集出版に當り、私に過分なる序文を賜はり且つ出版の御配慮までして戴いた花田先生、並に御援助を賜はつた依田秋圃、林光雄、柏木信一郎等の諸氏、又出梓一切の御面倒を見て戴いた日本短歌社主木村捨錄氏に對し深甚の謝意を表する。

昭和十七年三月

東京目黑　伊藤源

歌集三十年

配給元 東京市神田區淡路町二丁目九 日本出版配給株式會社
日本出版文化協會會員番號一二二〇九〇號

昭和十七年八月廿五日 印刷納本
昭和十七年八月卅日 發行

定價金三圓五十錢 ㊫

著者 伊藤(イトウ)源(ゲン) 東京市日本橋區本町一丁目十番地

發行者 木村捨錄 東京市赤坂區新町四ノ三

印刷者 大橋章臣 東京市赤坂區新町四ノ三

印刷所 大橋印刷所 (東東三三八六)

發行所 日本短歌社 東京市日本橋區本町一丁目十番地 振替東京六五一五七番 電話日本橋三九一一番二五〇三番

發行所 八紘發行所 大阪市天王寺區上汐町三丁目二五番地 振替大阪七八八七五番 電話天王寺四七六七番

948
258

終